BEE GEES

Love Sounds 54

A KYODO TOKYO PRESENTATION '74

BEE GEES

ビー・ジーズ
世界公演
スケジュール

8月21日 ハリファックス
8月22日 モンクション
8月23日 セント・ジョン
8月25日 モントリオール
8月26日 オタワ
8月27日 デトロイト
8月28日 ハミルトン
8月29日 ハミルトン
8月30日 ウィニペグ
8月31日 ウィニペグ
9月1日 ウィニペグ
9月2日 サスカ
9月3日 リジーナ
9月5日 カルガリー
9月6日 エドモントン
9月8日 バンクーバー
9月10日 ロスアンゼルス
9月11日 ロスアンゼルス
9月13日 ホノルル
9月18日 クライストチャーチ
9月19日 ブリスベン
9月20日 ブリスベン
9月22日 シドニー
9月23日 シドニー
9月25日 シドニー
9月26日 キャンベラ
9月28日 シドニー
9月30日 メルボルン
10月1日 メルボルン
10月2日 メルボルン
10月4日 アデレイド
10月7日 パース
10月8日 パース
10月10日 クアラルンプール
10月11日 バンコック
10月13日 マニラ
10月14日 ホンコン
10月15日 ホンコン
10月16日 ホンコン
10月19日～11月6日 日本公演
11月8日 アラスカ

ビー・ジーズ1974年公演スケジュール

10月19日(土) 7時開演 東京・中野サンプラザホール
主催＝東京12チャンネル

10月21日(月) 6時30分開演 広島郵便貯金ホール
主催＝広島テレビ

10月22日(火) 6時30分開演 松山・愛媛県民館
主催＝テレビ愛媛

10月23日(水) 6時30分開演 大阪・フェスティバルホール
主催＝FM大阪

10月24日(木) 6時30分開演 京都会館
主催＝音協

10月25日(金) 6時30分開演 大阪・フェスティバルホール
主催＝FM大阪

10月26日(土) 6時30分開演 名古屋市公会堂
主催＝FM愛知

10月28日(月) 6時30分開演 東京新宿・厚生年金ホール
主催＝音協

10月29日(火) 6時30分開演 静岡・駿府会館
主催＝テレビ静岡エンタープライズ

10月30日(水) 6時30分開演 横浜文化体育館
主催＝ラジオ関東

11月1日(金) 6時30分開演 新潟体育館
主催＝新潟総合放送

11月3日(日) 7時開演 東京・中野サンプラザホール
主催＝東京12チャンネル

11月4日(祭) 2時開演 東京・中野サンプラザホール
主催＝東京12チャンネル

11月5日(火) 6時30分開演 仙台・宮城県民会館
主催＝音協

11月6日(水) 6時30分開演 札幌・厚生年金会館
主催＝北海道新聞、北海道文化放送、道新文化事業社

若い若い諸君に考えてほしいこと

木崎義二〈音楽評論家〉

今の若い音楽ファンは恵まれている――と書きだすと、なんとなく年寄りじみてくるが、三十路を迎えた小生の年代からみれば、確かに現在の20才前後の音楽ファンは恵まれていると思う。いや、ここで誤解されないように、予めおことわりしておくと、小生は恵まれすぎている諸君をやっかんでいるのではない。恵まれているということは、すばらしいことだ。人間誰も生まれながらにして、恵まれた星の下で生活できる権利を持っている。その権利すら認めてくれない今の社会では、たとえ音楽に恵まれているだけでも、感謝すべきことなのだろうか。

だが、恵まれすぎるのも、時には考えものだ。恵まれすぎ、現状に満足しているあまり、それ以上深く考えようとしない、ノンポリ型が多くなってくるからだ。流行に左右され、すべての面で個性を喪失しているのは悲しむべきことなのだ。

街のなかに出てみよう。ファッション・メーカーのキャッチ・フレイズに乗せられて、やたら流行の最先端をきどった衣服を身につけて闊歩する若者がなんと多いことか。それもピタリきまっていればまだ救われる。なかには全然似合わないスタイルで得意がっている人がいる。本人はどういう神経なんでしょうかねェ。

他人のことをとやかく言うのはどうも性に合わない。十人十色――の言葉があるように ファッションにも個性が欲しい、と願っているのだが、よけいなおせっかい、と受取られてもしかたあるまい。

今でこそレコード入手の方法は簡単になったが、一時代前の音楽ファンは聞きたい音楽すら満足に聞けなかった。レコードはまず高価なものであり、収入に比較して値段は高かった。いや、高いだけではなく、日本で発売されるレコードに限度があり、現在のようになにがなんでも発売されるようなことはなかった。輸入盤を扱うレコード店に出かけても目的のレコードはほとんどない。マニアは仕方なく、シュワンなどのカタログを見ながら手金を払って注文したものだ。

それだけにやっと手にするレコードは貴重だった。無駄使いを惜しんで買ったレコードにはそれぞれ愛着があった。今のようにアルバムが列をなして無差別に発売される時代では考えられないかもしれない。しかし、量産によってアルバム１枚の価値観が下がり、同時に数あるアルバムから選択する能力も低下したのは事実だろう。――――――――

現在はレコードの数も豊富にある。昔と違って、若者は大量の枚数から自由に選択するゆとりを与えられている。参考となる情報源も多い。なかには情報過剰で的が定まらない、とボヤく怠慢な御仁もいらっしゃる。甘えるのもいいかげんにしろ。自分の買うレコードぐらい自分で調べて買うぐらいの熱心さが欲しい。

それにしても、わが国のレコード・セールスのランクを見ると時々悲しくなってくる。レコード会社の宣伝に乗せられて売れたと思われるレコードが、つねに上位にランクされているからだ。人が言うから買ってみよう、誰かが持っているからぼくも――といった態度がミエミエなのだ。つまりは、自分の耳を信じてじっくりレコードを買う人が少ないということだ。恵まれた時代に生まれてきたことをもっと自覚すべきじゃないかね。毎月100枚を越す新譜アルバムのなかには、雑誌社、放送局、音楽もの書き屋の目に止まらず、だが、そのまま捨てるにはあまりにも惜しいアルバムがけっこうあるものだ。自分の目と耳をもっと大きく開いてみようではないか。

レコードの発売枚数も急激に延びたが、平行して激増したのが来日アーティストである。'60年前後の来日アーティストといえば、本国では人気下降線をたどるような二流クラスが、やっと日本の地を踏むのが常識だった。それでも憧れのアーティストとして歓迎されたものである。しかし、時代と共に峠を越したアーティストの数は減り、人気絶頂で来日するケースが多くなった。というより、持ち駒不足によって新旧入り乱れての来日ラッシュになったと解釈すべきだろう。ポップス系で残された最後の大物といえば、現在エルヴィス・プレスリー、ローリング・ストーンズ、ボブ・ディラン――ぐらいではあるまいか。しかも、最近に至っては、２～３度の再来日は当然とされている。

来日アーティストの公演回数が多くなればお金のほうも予定以上に出ていく。音楽ファンが限られた予算のなかで切符を買うとなれば、涙をのんであきらめなければならない公演もあるだろう。切符を買ったからには、その公演だけは他の公演の分まで楽しもうと考えてもおかしくはない。だが、ミュージシャンにはミュージシャンの行きかたがあるように、会場のファンはファンなりに音楽の聴きかたがあるはずだ。日本のファンは、はたしてそこまで心得ているかな？。………………

昨日、ぼくはあるアーティストのコンサートの初日に出かけた。彼らは３回目の来日コンサートだった。３度目ともなれば気がゆるんで、リラックスした雰囲気でコンサートを開こうと考えたのか、それとも、日本のファンは“甘い”から、何をやっても文句を言わない、とナメてかかったのか、ショウの出来は最悪、それでも会場から不満のヤジは飛ばなかった。

新聞評には“彼らのセクシーなステージにお客は酔っていた”と出ている。新聞からしてこの調子である。あとは何をかいわんや、だが――。

前回のステージがあまりにもショッキングであり、言語に絶する魅惑的なステージであったからこそ、ぼくは今回のステージにも大いなる期待を持って出かけた。しかし、３回目の彼らはサウンド・チェック、リハーサルなしのいきなりぶっつけ本番。これで期待通りのステージができるわけがない。音の悪さ、バランスのひどさは、音楽以前の問題だった。

あれほどメチャクチャなステージは外国だったら通用しないだろう。金返せ!!――までの騒ぎに発展するところだ。本人たちはそれを充分承知している。日本だから、ただそれだけで許されているのである。

金を払ってコンサートに出かける諸君、日本は今や世界中から注目されるロック王国である。アメリカ、イギリス並のベスト・セラー・アルバムは出ないかもしれない。が、日本で人気を得れば、落ちかかっていた人気も本国でもり返すほど彼らは日本の市場を重要視している。なら、彼ら来日アーティストに対してもっと厳しい目を向けようではないか。

つまらない曲に義理(？)やお世辞でなにがなんでも拍手するのは止めよう。感動的な曲、演奏には立ちあがって拍手するぐらいの心掛けが欲しい。その反面、つまらない曲、イモ演奏には不満、不平を堂々と言おう。自分の主張を明確に出そう。それがやがてはアーティストたちの反省につながり、すばらしい演奏となって自分たちのもとに帰ってくるのである。

ロック・コンサートはステージと客席とのコミュニケーションが大切だと言われる。ロックの公演に出かけることは、ノルことだと頭から信じこんでいる人がいる。ゴキゲンな演奏に自然にのせられて、陶酔していくのはわかる。が、ステージ上の演奏、リズムとは無関係にノリまくるのは“悪ノリ”というものだ。この悪ノリ君が残念ながら今や日本のロック・コンサートの名物となってしまった。本人は気分よくのっているらしいが、それを見せられる残された奴がどんなに不愉快な思いをしているか考えたことがあるのだろうか。

ステージとのコミュニケーションを大切にする人は、ステージと同時にのっていく。けっして１人だけでバカのりはしない。その音楽心がわかっている人は、手拍子のタイミングも上手だ。悪のり先生はその点自己流というかメチャクチャ流といおうか、何をやってもさまにならない。こういう人は、音楽をわかったつもりでいながら、じつはまったくわかっていない、つまりは音楽の楽しみかたを知らない人なのである。

レコードの発売枚数が激増し、来日アーティストの公演回数も増し、何も彼も苦労なく見聞できるようになった。自分で努力せずに、人を頼りにすることによって、その場をやりすごすこともできる。だが、自分でクリエイトしていく楽しみを持たない人はどこか哀れだ。せめて自分だけでも取り戻そう。

今や、個性のないことがひとつの個性となっている時代かもしれない。しかし、ビートルズ以下、イギリスのビート・グループ族が同じ考えにたっていたら、あのビート・グループ旋風は当然起らなかったし、今日のロックも生まれてはこなかっただろう。

現代のロックは10年、20年前の先輩たちが敷いたレールの上に誕生した。ある曲はロックン・ロールのスタンダード・ナンバーとなって、今だに後輩バンドのレパートリーとなっており、その曲にしびれる若者も多い。現在の音楽の流れ、ロックの傾向が、今後どのように発展していくのか、そこまでは誰もわからない。ただ言えることは、音楽ファンもミュージシャンと一諸になって、ここまで育ってきたロックをさらに大きく育成していく義務がある、ということだ。

そのためにはただ発売されたレコードを聴き、コンサートに出かけて無意味に拍手するだけでは何も生まれてはこない。10年、20年後の後輩たちのために、そして、わが愛する音楽の未来のためにも、実になるような種を播くことだ。今日からでも遅くはない。もう一度、音楽とは何か、自分が何んであるかを自覚してみようではないか。

特別取材

野口五郎にとって ビー・ジーズとはなにか

インタヴュアー● 中根幸夫(デイリー・スポーツ文化部)

「中学校の１年か２年のころでしたかね。ぼくはオーティス・レディングやレッド・ツェッペリン、それからディープ・パープルなんてのに夢中だったんです。オーティスはむしろ、いまていうソウル、当時のリズム・アンド・ブルースを好きというのでなく、例外的に好きだったんだけど……。ビー・ジーズもそのころ、耳にしました。ぼくは、仲間たちとアマチュア・バンドやってて、ビー・ジーズの〝ジョーク〟なんて曲は、レパートリーにも加えてたもんです」

野口五郎は、こうビー・ジーズとの出逢いを語った。当時、それ以上に深い縁があったというのでもなさそう。

「マサチューセッツ」「ホリディ」「ニューヨーク炭鉱の悲劇」などと続いたとき、ぼくの記憶では一方にはフラワー・ソングなどという言葉であって、それは「花のサンフランシスコ」などの曲なのだが、どうにもそれがビー・ジーズにだって当てはまるような気がして仕方なかったものだ。

ついでにいうなら、タイガースが人気を高めたとき、最初のビー・ジーズ来日の噂が出て、もしかしたら共演するはずだったのだけれど、来日中止となってビー・ジーズとタイガースの国際電話だけが残った。だから、そのころの縁の深さは、野口五郎よりはタイガースの方にあるのではないろうか。

さて、野口五郎自身だが、ビー・ジーズを知る以前から、具体的にいうなら小学校５年生から、すでにアマチュア・バンドを始めていたとのこと。きっかけはベンチャーズを聞いたことにあり「だから、ベンチャーズのことなら、いろいろ想い出もしゃべりたいこともあります。近ごろの彼らについては、ちょっと失望しているけど」ということになるのだれど、小学校５年でギターやドラムを習い、友だちを誘って「自分も泣きながら〝なんだい、こんなこともこなせないのが〟なんてハッパかけてた」らしい。だから、初めてビー・ジーズを聞いたとき、すぐメロディーのきれいなことと、ボーカルが独得なのに気付くほどに、耳もこえていた。

「あの声は、けっしてきれいじゃないし、最初〝あまりうまくもないな〟って思いましたね。だけど、そのことがきれいなメロディーと、奇妙にというか、うまくマッチして、おもしろい効果を出してるって感じを受けたんです。これは、そのまま、いまもあるでしょ」そんなわけで、ぼくが自分たちのバンドのレパートリーに加えたといっても、バラエティーをもたせるというほどの意味であって、彼らの世界にぐんぐん引っ張り込まれたというようなことじゃあないです」

その後、ロビンの独立があったし、コンサート活動も中断され、あらためて３兄弟で再出発というようなことがビー・ジーズに起っているし、また野口五郎もいろんな方向に目を向けて「あまり聞いてなく」ても、当然のことだろう。ただ「ロンリー・デイ」を聞いたときには、強く印象づけられたという。それは、抜群の出来栄えだからというのではなくて、それまでのものに比べてリズムも早いテンポのものが使われているし、毛色の違いみたいなことでオヤッ！　という気がしたためらしい。

そして、つい最近では「テレビでビー・ジーズのステージ演奏を見たんですが、これはカメラワークの問題もあるし、レコード聞くのと似たようなものでした」ということになる。生でステージを見れば、プレイの方も表情の方も、歌とのつながりがこまかくわかって、なるほどということになるのではないかという。

ところで、ビー・ジーズのファンはいつまでも若く（ミドル・ティーンが圧倒的だという）それも女の子が多いので、野口五郎ファンとかなりダブっているのではなかろうかと、公演主催者はいう。彼に、ビー・ジーズについて語ってもらおうというのもそれが理由だが、どうだろうか。

野口五郎の最近は、かならずしも熱唱絶唱というやり方ではないし、とても歌謡曲っぽい作品になってきている。高校を卒業した18歳、もう彼自身が大人の仲間入りする年齢になっていて「少しずつ、大人っぽいムードにして行こうと思っています。バラードも歌うし、歌謡調のものもあるし、トム・ジョーンズのものもあるといったようです。オリジナル曲で、詞を見てもらえれば、その辺のこともよくわかるはずです」というのだ。

ロンドン実況盤という「愛ふたたび」（詞・山上路夫、曲・佐藤寛）や「甘い生活」（詞・山上路夫、曲・筒美京平）などに、それがよく出ているというわけ。

これは、彼の成長とともに、彼のファンも成長しているということに基いている。いま、野口五郎ファンは、圧倒的に彼と同じ年ごろから20歳ぐらいまでが多いとか。もしも、彼が20歳になっても、ファンが14、５歳だとすればどんなものだろうと聞いたら「そんなことはさせません。16のときは16のぼくがあり、18では18の、そして20歳では20歳のぼくがあるわけだけど、その成長と変化は歌にも当然現われるし、そのようにファンも成長すると思います」との返事だった。

だとすれば、仕事のあり方も、野口五郎とビー・ジーズとでは、根本的に違う。もともと体質的に違うので、音楽性の違いは何もいう必要はない、聞けばわかることだが、この言葉の中にもその裏づけがあるではないか。

野口五郎とそのファンは一体だとすれば、ビー・ジーズのファンは次々と変って行くのだ。変らないのはその年齢の方である。ポリドールの話でも、ビー・ジーズのファン・クラブの人数は、ほとんどいつも一定しているという。５年前のファンはいま、ビー・ジーズをほとんど聞かないかも知れないが、５年前にはビー・ジーズにとっての音楽人口とはいえなかった人たちが、そのあとを埋めているわけだ。

「小さな恋のメロディ」という映画があって、その音楽はビー・ジーズによるものだった。そのサウンド・トラック盤はすごく売れたし（もちろん、映画もヒット）そのメインテーマ「メロディ・フェア」も大いに売れたのだったが、ストーリーの爽やかさと音楽の爽やかさがひとつのものであり、まさに〝小さな恋〟だったからこその成功だった。とすれば、ビー・ジーズにとって、ファンの年齢が14、５歳というのは、絶対の必要条件なのかも知れない。

「一口にいうなら、ビー・ジーズの音楽は、ずっと変ってないってことになるでしょうね。また、変っちゃいけないんじゃないかって気がします。彼ら自身の年齢は、ぼくよりもずっと上なんだけど、音楽的なねらいは、ずっと同じ線、姿勢を崩さない。そこが、さすがって気がするんです。ぼく自身にとっては、ステージを見たいってよりも、ときどき気分を落着けたいときレコードを聞くって感じのビー・ジーズなんだけど、ファンにとっては、安心感もあるし、たまらない魅力なんでしょうね」

こう、野口五郎はいう。

それにしても、いまのイギリスは、音楽的にも世界のリーダー役をつとめることが多くて、ロック・ミュージックなどにしても、様々な試みがなされていて、どちらかといえばビー・ジーズ的な存在は珍しいのではなかろうかと、これはぼくの感じなのだが、２度、イギリスを訪ずれている野口五郎に、その辺の印象をたずねてみたら、彼はとても納得できることだという返事。

「ぼくなんか、ときどき田舎に帰ってウーンと伸びをしたり、どっか静かなところに出かけたいなんて思うことがあります。それをやれば、とても気持が落着く。もちろん、落着く場所は、都会の中にだってあるんですけど、イギリスに行ったとき、その落着けるふんいきってのを強く味わいました。その中にいると、ビー・ジーズのような音楽が生れるのは、むしろごく当り前の状況なんじゃないかって気がしますね。音楽の中にある爽やかさだとか、きれいなメロディー、そんなものがそのまま、イギリスにはあるんです」

つまり、距離をおいて見るとき、野口五郎はビー・ジーズをとても肯定的に受けいれているようだ。身近にもってくると、彼自身の方向とは別なものなので、いろいろ批判的ないい方もせねばならないが、ビー・ジーズの音楽の存在価値そのものの評価とそれは、別個のことである。だから、変ってはいけないし、変って欲しくないという表現になる。

それからもうひとつ、ぼく自身はビー・ジーズの音楽に、どこかかつてのサイモン&ガーファンクルなどと共通したものを感じるのだが、そのことをたずねると「ウーン、ぼくはフォーク・ソングってのはあまり好きじゃないし、聞いてもないから知らないのですが、どうなんでしょうか――そう、そういえば共通点はあるんでしょうね」と、どうやらこれは、ぼくをたてた返事だった。こちらもうまく説明できなくて、たとえば淡々とした歌いぶりとか、映画の中での仕事などに、いくつか共通点を見つけたつもりでいるのだけれど、彼がそれにもし同意できなくても、その方がほんとかも知れない。

――野口五郎ファンと、ビー・ジーズのファンとは、かなりダブっていると思うか。

「さあ、どうでしょう。ぼくのファンは17、8歳から20いくつかくらいが中心ですけれど……」

――ビー・ジーズは野口五郎にとって、どういう存在か。

「ぼくが音楽的なことあれこれやり始めたのは、ベンチャーズなんですが、ビー・ジーズを知った最初からこれまで、ぼくのいういろやってみたい仕事の中の一部分には、彼らのやってる世界もあるということでしょうか。ぐっと身近に感じるってのとは違う」

――ビー・ジーズの魅力は何か。

「まず、メロディーのきれいなことでしょう。でも、あのボーカルがないんなら、存在価値はありません。あれは独得の味ですね。だから、きれいな心でいたい、ロマンティックな憧れをもち続けたい、というような年代の人には、とても魅力的だろうと思う。ぼくが彼らに注文するとすれば、いまのままでいなさいってことです。それができるのが、どうも日本と外国の違い」

――彼らを意識したのは……。

「自分たちのアマチュア・バンドで〝ジョーク〟を歌ったりしましたからね。そう、やはり〝マサチューセッツ〟〝ホリディ〟〝ワールド〟〝メロディ・フェア〟〝ロンリー・デイ〟など、かなり聞いてはいますね。いくつかの試みもしてるようです」

まあ、こんなような経過をまとめて、野口五郎自身と、彼のビー・ジーズ観をまとめてみたのだが、どれだけ納得してもらえるかについては、ぼく自身は何ともいえない。それと、彼のコメントの部分でも、その意味をとってこちらが文章にしたので、ニュアンスに微妙な違いが起ったおそれがあるが、その責任はすべてぼくの方にある。結論としては、５人メンバーでスタートしたときも、兄弟３人の現在も、音楽的に基本的な変化はないし、そこがファンをつかんでいる魅力のポイントでもあるのだろう、ということで一致した。そしてまた、多くのポピュラー・ファンが、ビー・ジーズ音楽に入門し、そして卒業して行く、通り道にある当然のくぐり門的な存在なのだろうという感じ方でも、一致したように思う。

ただ、ぼく自身がビー・ジーズについて、そう多くの語るべき言葉をもたない貧しい聞き手なのだが、何度も文中で強調しておいた〝メロディーとボーカルのちょっとアンバランスなような魅力〟とか〝イギリスという風土の中で、ビー・ジーズの存在はむしろ自然な感じがする〟というような野口五郎の言葉に、こちらはいちいちなるほど、なるほどとうなずいて、それなりに新しいものをひき出せたような気がしたのだが、いかがなものであろうか。

ビー・ジーズの３兄弟の素顔は、とても陽性で、なかなかにはしゃぎまわったり、話している限りではロマンティックなタイプというのではないと、ポリドールの担当者に聞いたが、きっとそうだろうなと思う。音楽の場合、例の〝文は人なり〟と同様のことをいえると思うのだが、それと同時にまたステージでの印象と素顔が逆ということが多い。表面的にはそう見えるのだが、心の中は〝音楽は人なり〟といえるのだと思う。ビー・ジーズの３人の心やさしさは、陽気な振舞いになってあらわれるのだろう。

だから、メロディーの爽やかさ、美しさを感じたとき、ぼくたちはビー・ジーズの人柄にやさしさ、甘さを想って、決して大きな間違いはないはずと思う。野口五郎が、ビー・ジーズにいつまでもいまのままであって欲しいと願うのにも、それがあるのではないかと思った次第だ。ぼく自身、もうビー・ジーズに夢中になるなどというには縁遠い年なのだが、この爽やかな音楽にひかれる多くの人たちのことを、ほほえましく見ることはできるつもりでいる。

ビー・ジーズ・サウンドの秘密

なにがかくも長持ちさせるのか……

八木 誠〈音楽評論家〉

“ビー・ジーズの音楽は、言葉や理屈で飾りたてなくても充分に素適なのですよ。ネエ、そうじゃありませんか”

いろいろ考えたあげく、こんな感じではじめてみてはどうだろうと思いました。

そもそもは“ビー・ジーズ・サウンドの魅力や、長持ちの秘密について述べよ”—というのが与えられたテーマだったのですけれども、これが実は僕にとっては、とてもむずかしい問題であることに、いま気が付いたんです。

たしかに、ビー・ジーズが好きかどうかといわれれば好きにちがいはないし、その音楽性についても、自分なりに納得はしているつもりです。けれども、じゃあどこが好きでどこがいいのかきかれると、これがどうもうまく答えられない。というより、あらためて考えたことがない、といった方がいいかもしれません。

これがたとえば、新人のグループであるとか、奇々怪々なサウンドをもったグループであるとかというのだったら、ハナシは変わってきます。いかにもわかったふりして理屈をこねくりまわしていれば、どうにかカッコはついてしまうでしょう。ところがビー・ジーズときたら、もうあまりにもお馴染み。そのうえ、音楽はといえばこれがまた奇々怪々どころか、しごくまともときているんです。これじゃあ、どうしようもありません。

下手に“ビー・ジーズの音楽は”などと、大上段に構えて話そうものなら、かえってこちらが笑われてしまいそうな気がします。

1967年5月に、あの衝撃的なデビューを飾って以来、実際、ビー・ジーズは発表するレコードをことごとく大ヒットさせ、世界中のファンを夢中にさせてきました。「ニューヨーク炭坑の悲劇」にはじまって、「ラブ・サムバディ」「ホリデイ」「マサチューセッツ」「ワールド」「ワーズ」「獄中の手紙」「ジョーク」「メロディ・フェア」「ロンリー・デイ」「傷心の日々」etc……と、枚挙にいとまがありません。おそらく、ヒット曲の多さにおいては、どんなグループにも劣らないでしょう。

しかも、これらの曲は単に一時のヒット・ソングとして終ってしまうことなく、いつまでも人々の心の底に残りうる魅力をもっているといえます。

あるときは街角のジューク・ボックスから、また、あるときは何気無くスイッチを入れたラジオのスピーカーから、「マサチューセッツ」や「ラヴ・サムバディ」のメロディーが、今でも流れてきたりすることがすくなくありません。そして、いつもはやれロックだソウルだと騒いでる僕なんかでも、そんなときは不思議となごんで、何ともいい知れぬ良い気分に浸ることができます。たとえていうなら、都会の雑踏の中で清らかな水の流れにめぐり逢ったような情緒や素朴さが、ビー・ジーズの音楽には感じられるのです。

これはもう、とても言葉ではいいあらわせないもので、結局は、ビー・ジーズのビー・ジーズたるゆえんも、そのあたりにあるのではないかと思います。

よく最近は“手作りのよさ”などという言葉を耳にしますけれども、ビー・ジーズの音楽もいってみれば、この“手作りのよさ”に通じているのではないでしょうか。もちろん“手作り”という、ただそれだけの物理的なことからすれば、すべての音楽はそうにちがいないのですけれど—彼らの音楽には、本当の意味での“手作りのよさ”があって、だからこそ、人々に与える感動も大きいのではないかと思うのです。

で、この“手作りのよさ”ということについてですけれども、いつか読んだ五木ひろしのアルバムのライナー・ノーツに、こんなことが書かれていました。平凡編集局長の斉藤茂さんが“手作りのよさを歌う五木ひろし”というテーマの中で書かれたもので、それによると、

“手作りのよさ”は、ことばをかえていえば“あたたかさ”であり、そしてさらに“なつかしさ”でもある—というようなことを、斉藤さんは述べておられます。このことは、ある意味でビー・ジーズの音楽にも充分通じるのではないでしょうか。僕自身が五木ひろしの大ファンであることも影響しているのかもしれませんけれども、たしかにこの両者には相通じる“やさしさ”や“なつかしさ”があるように思えるんです。そして、そうした“やさしさ”や“なつかしさ”—いうならば“手作りのよさ”は、たとえ5年が10年たっても決して飽きることなく、むしろ、時がたつにつれて光沢をおびてくるし、また、そうあってこそ、本当の“手作りのよさ”といえるのではないかとも、僕自身は考えます。

よくポップス界には奇をてらって、妙な格好をしたり、前衛的な試みをやって話題を集めたりするグループがいますけれども、ビー・ジーズの場合は、そんなことは万にひとつもありません。サウンドはシンプルですし、歌い方やスタイルもきわめてオーソドックスです。にもかかわらず、彼らの音楽は世界中のヤングはいうに及ばず、中年やお年寄りの

人々にまで幅広い支持を受けています。本当に驚くくらいに、ビー・ジーズのファンは幅が広いんです。いや、スタイルがオーソドックスで、"しごくまとも" だから、それだけの幅広いファンが獲得できたのだといえるかもしれません。

奇をてらったり、前衛的な試みをしないかわりに、ファンはいつまでもビー・ジーズのファンでいられ、いつも安心して彼らの音楽にとけ込んでいけるのです。もちろん、いつまでも「マサチューセッツ」や「ラヴ・サムバディ」や「メロディ・フェア」にこだわっていてはいけないのかもしれません。当然ながら、この10年近くの間にはいくつかの動きなどもあって、そのことにも私達は注目しなければならないと思います。たとえば「オデッサ」とか「トゥ・イヤーズ・オン」とか、最近の「ライフ・イン・ア・ティン・キャン」といったアルバムにみられる、傾向の変化、成長の過程などについても。でも、本当のことをいうと、僕はビー・ジーズというと、どうしても「マサチューセッツ」や「ラヴ・サムバディ」をオーバーラップしてみてしまう。そうしてビー・ジーズのすばらしさを再認識する、というより、させられずにはいられないというようなことも、実際にはよくあるんです。

"ビー・ジーズのビー・ジーズらしさ"、それに、"ビー・ジーズのききかた" —などということについて。

しごくまともな中にも、ビー・ジーズのオリジナリティーは当然あって、そんなことについて、すこしハナシてみたいと思います。

まず、ビー・ジーズのもっとも大きな特徴は何でしょう。いろいろありますけれども、その第1としてギブ兄弟が中心となっている、いわゆるファミリー・グループのひとつである、ということがあげられます。これはチーム・ワークを徹底させるという点においてとっても強力な武器でしょう。およそ10年間という長期間にわたってグループを維持できた理由も、そこにあります。しかも、このギブ兄弟が揃いも揃ってすぐれた才能の持ち主ときているんです。作詞や作曲はもちろんのこと、アレンジからプロデュースまで、すべての作業をやってのけてしまうのです。

はじめこそは、そうした才能も充分に発揮されていなかったといえますけれども、「オデッサ」あたりをきっかけとして、サウンド・クリエーターとしても、ビー・ジーズの面々は持ち前のすばらしいセンスを発揮しはじめました。たとえば、アコースティックなギターのソロでシンプルにまとめたかと思えば、次にはぶ厚いストリングスをかぶせてみたり、ホーンを加えて幅の広さをもたせてみたり…といった具合。さらに、最近では数多くの有名ミュージシャンを参加させ、それぞれの楽器の特性を生かしながら、新しいビー・ジーズの世界というべきものをつくりあげています。

もっとも、いくらサウンドに変化を加えたとしても、ビー・ジーズの音楽そのものの本質はかわっていません。これはたとえバックをどうアレンジしようと、変わりようがないんです。その理由は、おそらくギブ兄弟の声や歌い方にあるのでしょう。ふるえるようなハスキーな声と、美しいハーモニー、それと語るように歌うあの歌い方は、まさしくビー・ジーズならではのものですし、これを失った彼らには今の半分の魅力もないかもしれません。

流れるようなストリングスも、美しいギターの調べも、そうした彼らの歌やハーモニーの見事さがあって、はじめて生きてくるものだと思うのです。ただ、中にはビー・ジーズのあの声がいやだという人もあって、そういう意味では、とっつきにくい点もたしかにあるかもしれません。けれども、その好き嫌いはともかく、自分たちの個性を巧みにとらえて音楽をつくっていくという、ビー・ジーズの着眼の良さには敬服せざるを得ないところでしょう。

ところで、音楽作りといえば「トゥ・イヤーズ・オン」でみせたそれは、これまでのビー・ジーズの活動の中でも、とくにすぐれたもののひとつであるといわれています。これはご承知のように、それまで何かとゴタゴタしていた彼らが久しぶりに発表し評判を呼んだアルバムですけれど、僕自身にとっても、これはやはり最高にすばらしいものの1枚であると思っています。バックのサウンドもずいぶんパワーフルになっていましたし、メンバーの歌にも、何かものすごい活気のようなものがうかがわれたものです。もちろん、パワーフルとか活気があるとかいっても、大ロックン・ロールをやってるとか、エレキ・ギターをガンガン鳴らしているとかといったこととはちがいます。いってみれば内面的な躍動感みたいなもので、やはり、これも口ではうまくいいあらわせないものなのです。ただいえることは、とにかくこのアルバムを含めて、ビー・ジーズの作り出す音楽はみんなとてもいい曲で、しかも、どんな場合でもそこにビー・ジーズがいる、といった感じなのです。このイメージは、たとえば「マサチューセッツ」と「トゥ・イヤーズ・オン」とを比べてみてもいっこうに変わりません。どんな場合にも私達はそこにビー・ジーズを発見でき、一方ではまたいろいろな工夫やアイデアが施されていることにビックリしたりするのです。

その都度見栄えを変えていくもひとつの方法ですけれども、反面、変わらない良さというものもあって、そんな中に実は微妙な変化や新しい試みが加えられているのをみつけたりすることもありますね。むしろ、そんなときの方がはるかとビックリする度合いも大きく、その印象も強いのではないかと思うのです。

変わらないといえば、ビー・ジーズがスタートしてこのかたずっと "愛の歌" を歌い続けている、ということも大きな特徴のひとつとしてあげられるのではないでしょうか。

いつだったか、このことについて彼らは"僕達にとって音楽は喜びを伝えるもので、だから、悲しいことやつらいことはあまり歌にしたくない" というようなことをいってました。

たしかにビー・ジーズのこれまでの音楽作りをみていると、すべてのナンバーがラブ・ソングですし、いわゆるプロテスト・ソング・タイプのものや、自問自答を歌ったような難解なものはほとんど見当りません。でも、考えてみれば "愛の歌" というのはもっとも自然で、それだけに強い説得力をもつこともたしかでしょう。それに、今みたいないろいろな不安や不満をかかえている時代の中で、本当に僕達が欲しているのは、そうした不安や不満をうわ塗りした音楽ではなく、ある意味でストレートに現実を忘れることのできる音楽ではないか、というような気もするんです。

で、そのきき方ですけれども、これは人によって、あるいはその場の雰囲気によってさまざまです。たとえば1人でボサッとしながらきいてもいいし、恋人と2人でいるときにきく「メロディ・フェア」なんかは、何ともいえずいいものでしょう。どちらにしてもビー・ジーズの音楽には、その場のムードに応じた臨機応変さみたいなものがあって、それぞれが自分達の世界を作ることが可能なのです。いうなれば、第3者の入り込める余地を作ってくれているとでもいいますか。バック・グラウンド・ミュージックというときこえはよくないかもしれませんけれど、それができて、しかもその都度楽しさを与えてくれる音楽というのも、案外すくないのではないでしょうか。そして、そうした魅力をもったものこそ、真のグッド・ミュージックといえるのではないかというふうにも、僕は考えるのです。

"ビー・ジーズにも苦難の時代はありました。でも、そんな時代があったからこそ、現在の彼らがあるともいえるんですネ"

いわゆるスターといわれる人達のほとんどは、何らかのかたちで苦労をしてきています。プレスリーやビートルズにしたってそうですし、ビー・ジーズにもめぐまれない時代はありました。彼らが有名になったのは、先程もいったように1967年のことですが、そうなるまでは、何と10年近くの月日がかかっているんです。これは大変なことでしょう。いくら辛抱強い人でも、なかなかこんなにはがんばれないものです。でも、そうした下積み生活があったからこそ、その成功も大きく、またこんなに長い間トップ・スターとして活躍していられるのかもしれません。

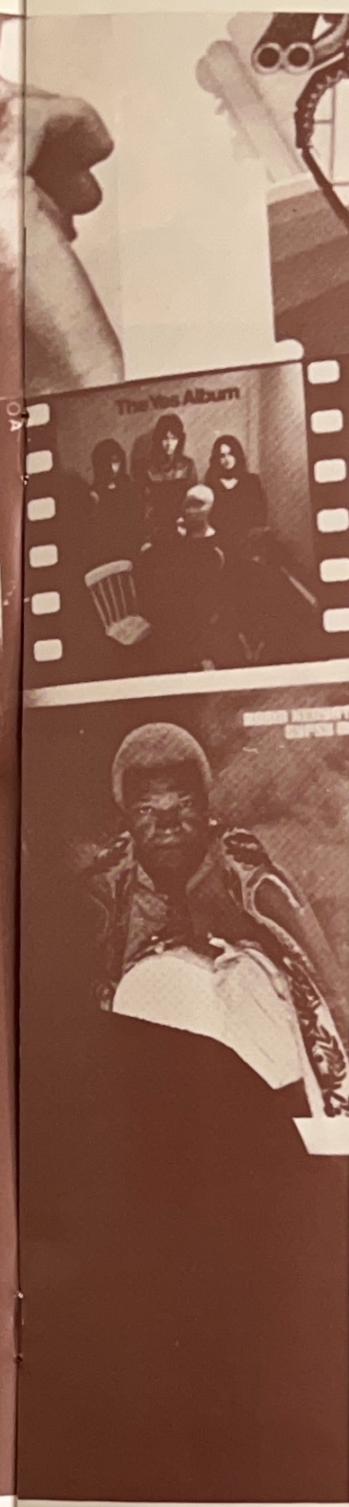
そういえば、若い頃の苦労は買ってまでしろ、なんてよくいいますし、苦あれば楽あり、なんていう言葉もあります。たしかにはやくから苦労した人はどこかちがうもので、そうした時代に積み重ねられた "たくわえ" というのは、知らず知らずのうちにでてくるものです。そりゃ、天性の素質とか環境によってもちがってくることはあるでしょうけれど、それ以上に重要なのはその人個人の努力や、過程においてどうだったか、といった問題でしょう。いくらすぐれた素質をもっていても、それを育てていこうとする意志や努力がなくては何にもなりません。逆に、一生懸命努力し苦労してきた人達には、かならずやチャンスも訪れてくるものです。そして、そうした苦労や努力の積み重ねが多ければ多いほど、訪れるチャンスや成功の度合いも大きいのではないかと思います。

たとえ、ビー・ジーズにレノン&マッカートニーをしのぐ作曲の才能があったとしても、また、レターメンやサイモン&ガーファンクルに匹敵する歌唱力やコンビネーションがあったとしても、それだけで現在の地位を得ることはできなかったにちがいありません。これは当り前のことですけれども、そんな当り前のことがややもすると見逃がされたりする場合がすくなくないと思うのです。ビー・ジーズの根強い人気の裏には、そういったことに対する一種の反発みたいなものが働いていて、そうした力の結集が、ビー・ジーズというグループをより大きな存在へと押しあげているのではないか、などと考えたりもしているのですけれど……。

特別寄稿　ポップスと私

ビー・ジーズのあの甘い歌声が好き

南　沙織〈歌手〉

私とポピュラー・ソングとのおつき合いはもうずい分長いんです。沖縄にいたころ、友だちとの話題、家の中での楽しみに音楽の占める比率はかなり大きなものでした。そう、確か中学時代からかしら、いまちょうど同年代の若い方が郷ひろみさんや西城秀樹さんにしびれているのと同じように、それぞれのアイドルもあったものです。私のお気に入りはいっぱいいました。ビートルズだったり、タイガースだったり。むろんビー・ジーズも好きなグループのひとつ。

私って、そのころは「おとなしい」って評判の娘でした。クラスで仲のいいお友だちとはキャッキャッと騒ぎ回るのにクラス1つ違うだけで口もきけない、内気な性格。小学校時代「歌手になるの。本土へいってスターになるの」と夢みたいなこと——それが実現になって私自身が一番びっくりしているんですが——ほんとうに歌手というのはあこがれだったのですが、中学校に入ってから弁護士を陰ながら目指し、真剣に考えていたの。それは、たまたまお友だちのお兄さんが検事をしていて、かっこよかったから「それなら私は弁護士に」なんて思ってたんじゃないかしら。今から考えるとおかしいけど。まあ、つまり、そんなどちらかというと地味な存在でおしゃべりが好きな反面、1人お部屋にこもってラジオを聞くのが大好きな女の子でした。ベッドとステレオが大きく占領したそのお部屋は私のお城。タイガースの写真がカベいっぱいにはってあって、ラジオからはいつも音楽が流れてました。このお城は私だけのもの。弟だろうがパパだろうが“ノック”なしにはいろうものならカンカンに怒ったものです。ポピュラー“ベスト30”なんていう番組がまたよかったんだなあ。どういうわけかグループ・サウンズが好きだったわ。やはりハーモニーがすてきだった。何かしみじみ楽しさが伝わってくるみたいで……。激しいリズムや、フォーク・ソングのような訴えはないけれど、ラブ・ソングを含めて『やはり、音楽は“音を楽しむもの”だなあ』なんて感心もしたものです。

不思議なことに、レコードを買うって趣味をまるで持ち合わせていなかった。というのは沖縄のラジオ局ＫＳＢＫの、ナマの音楽が抜群にすばらしくって、また聞きたい曲がしょっ中かかっているから、レコードは必要じゃなかった。東京に来る1年ほど前、ＫＳＢＫでちょっとお仕事してましたけど、このスタジオがまたイカしてるんです。100曲分のカセットがズラリと並んでいて、リクエストが来ると、そのカセットのボタンを押すだけでＯＫ。それだけの操作で音楽が流れだす仕掛けだから、みんな先を争ってリクエストするわけよ。1番の楽しみは、何といっても金曜日の夜じゃないかしら。土、日曜日、学校（クライスト・ザ・キング・スクール）がお休みだから、この夜のラジオは休みの前日ということもあって楽しさが倍。ラジオ局もそんなところをねらって『電話リクエスト』の特集です。昼間、学校で『今夜、あなたにプレゼントするから、聞いていてね』を打ち合わせておいて、何度も何度もダイヤルを回します。だって、すごい人気番組だからいつだってお話し中。でもコツを憶えてしまって『シンシア（私）から○○へ』と名前を呼ばれたことも少なくありませんでした。1曲かかるのに80件ぐらいの名前が放送されるのですが、放送されるとうれしくってね。中にはひそかに思いを寄せているボーイフレンドにプレゼントして気持ちを打ちあけたり、思わぬ男性からもらってびっくりした人もいたみたい、えっ？　私、それは内緒ョ。

もう1つ私たちが楽しみにしていたこともやっぱり音楽と関係あるんです。学校の生徒会主催のゴーゴー・パーティー、バンドの手配やらＰＴＡの許可を全部私たちでやって、にぎやかに踊りまくる。ふだんラジオから聞き慣れている音楽にからだを合わせる気分は最高。私は踊るのも好きだけど、こんなパーティーの裏のお仕事が得意でした。バンドの値段を値切ったり、飲み物を無料で調達したり、次はいつごろって検討したり。つまりパーティーの制作というか提供というか。「これにかけてはシンシアは一流だ」っていわれたものです。今から思うと、何か音楽関係のお仕事がしたかったのでしょうね。勉強もしましたけど、こんなぐわいに私の学校生活は直接的にも間接的にも音楽音楽であけくれていたのです。

私のデビュー曲『17才』もそのころ。お話にちょっぴり関係あります。なぜか忘れましたが幾何の先生が『ローズ・ガーデン』というレコードをくださったのです。何度も聞いているうちにすっかり大好きになってしまいよく口ずさんでいたのです。東京にくる前は1度だって人の前で歌ったことはなく、この『ローズ——』だってこっそりお部屋で、だったのですが、デビュー前に筒美京平先生にレッスンを受けた時『好きな歌を歌ってごらん』といわれ、それを歌ったのです。よほど私のイメージと合っていたのでしょうか。『17才』が『ローズ——』に似た調子で出来上がって来ました。だから私にとってその幾何の先生も『ローズ・ガーデン』もたいへんに重要でうれしい役割りだったわけ。人前で歌えなかった私が……って思うと、ほんとうにびっくりしているの、歌手になれたことに。

さっきもいいましたが、音楽はまず楽しくなくっちゃいけないというのが私の持論。ロックにしてもポップスにしても、レコードにしても、ステージにしても、まず第1は楽しさ。先日、デビッド・キャシディーとお食事を一緒にして楽しかったなどという時もあるけれど、歌手よりも歌そのものが楽しくなきゃと思うのです。歌がいいから歌手もすてきになります。『歌は下手だけどかっこいいから』は私にいわせれば邪道。ハイスクール時代から私を楽しませてくれた曲はたくさんあります。『ミスター・ロンリー』（レターメン）『アンチェンド・メロディー』（ライチャス・ブラザース）『レット・イット・ビー』（ビートルズ）などが印象に残っています。

ビー・ジーズに関しては『マサチューセッツ』『ワーズ』『メロディ・フェア』『ホリディ』とあげればきりがないほど。彼らのよさは、あの甘さ、そして飾らない、しみじみ味わえる楽しさにつきると思います。むずかしい理屈は抜き。3度目の来日って聞きましたが、過去2度とも行けなかった。もっとも、最初の方はまだ私、沖縄だもの。ビー・ジーズのステージは“歌を見る”って感じがします。容姿同様、歌も見ちゃうの。やさしさ、なごやかさがどんどん自分のからだの中でひろがっていくのが、きっとよくわかるにちがいありません。パンフレット見ていたら、ビー・ジーズさんも、全くそんな姿勢で歌っているみたい。『ボクたちの歌は政治や宗教には無関係です。ジョーン・バエズがそれらを歌で表現しているのは自由だが、ボクたちは、音楽は喜びを伝えるものだと思っている。これから“愛の歌”を追求します』っていってるじゃないですか。音楽ってすてきですね。伝える側と受ける側が、会ったこともなく話し合ったこともないのに、お互いの気持ちが通じてしまう。最高の気分。

ビー・ジーズのほかで、最近凝っている、つまり、また一味違う楽しさを私に与えてくれているのは、スリー・ディグリーズを筆頭にカーペンターズ、ジェームス・テイラー、サミー・デイビス・ジュニア、ダイアナ・ロスといった歌手たち。スリー・ディグリーズは『外人さんってどんな形を作ってもサマになってるなあ、新しいアイデアを実にムリなく伝えてくれるわ』と感心のしどおしだし、カーペンターズは、先日武道館で聞いてすっかり酔いしれてしまいました。前から5列目にすわったこともきっと影響してると思いますけど、すてきだったな。サンタナ、ジャクソン5、キャロル・キングのステージにも行ってきました。だけど、まだまだ行けない方。あちらの一流どころがわざわざ来てくれるのですから、行かなきゃウソですよ。ちょっとプロモーターのＰＲになったかしら。でも、いまの日本のポピュラー・ソングのステージはとっても恵まれていると思うのは間違いのない事実でしょう。

話をビー・ジーズに戻しますが、彼らと私の接点が1つあります。私のＬＰの中に『メロディ・フェア』がはいっているのです。そうかなり前ですが、あのレコーディングのむずかしさは今でも忘れません。全体的に高い音域でまとまっているでしょう。聞いている分にはなんとも快いのだけど、いざマイクの前で歌うとすごくたいへん。たまたま私の音域と合ったからいいようなものの、今考えてもヒヤ汗もの。軽く簡単に歌っている個所が、実は一番むずかしいの。いい発見をしたものです。

ビー・ジーズ公演で、私の最も興味があるのはショーの構成とお客さまののせ方。ステージを大切にする彼らが、どんなプログラムを組んできて、どんなふうに進めるか。だんだんと楽しさが観客席にとり込んでいかせる手法、一方観客がその楽しさにどうひたっていくかの過程。そのうまさをとくと拝見、なんていっていても、私もきっと、そんな彼らにのせられて、すっかり酔っていると思いますが。

この日の私は、いつか“沖縄の私”を思い浮かべていることでしょう。あの教室、あの級友、あのラジオ、あのメロディ……この見えない糸をビー・ジーズがつないでくれるはずです。みなさんに思い出のメロディがあると同様、ビージーズは私にとって現在とまた続いている心の歌なのです。楽しさの上にある感激。これはもうことばでいい表わすことなどできないものです。

ソロ活動時代のロビン・ギブ（1969年）

'69年9月 TV映画キューカンバー・キャッスル撮影の時のバリーとモーリス

'70年9月 再結成第一弾LP「トゥー・イヤーズ・オン」のジャケット撮影の時

1970年初期、再結成した時に初めて写したもの

'70年7月 ソロ・シングル「レイルロード」を発表した頃のモーリス

'70年再び3人がグループを組むようになった頃

'73年6月「ベスト・オブ・ビー・ジーズVOL II」
のジャケットに使うために写したひとコマ

1973年　ロスアンジェルス・コロシアムでの
コンサート

ロビン夫妻と息子スペンサー君、メリサちゃんとロビンの家で

バリー、リンダそれに、1973年12月1日に
生まれた息子スティヴン君と

新らしい家の庭で彼の愛馬に乗ってゴキゲン
なモーリス

グリーン・ポップの新星“ベル”
第1部

Belle

“ベル”その名も耳新しく９月10日にデビューしたばかりの４人組です。洗練されたセンスと、抜群のルックス。平均身長175㎝からかなでるハーモニーの美しさは、各方面で早くも話題を喚起しております。もちろん彼らの目ざす音楽の真髄は、一言で「ハーモニー」といっても、決して過言ではありません。

そして今後新しいサウンドの創造を目ざし“ベル”独特のスタイル、すなわち誰にでも口づさめるさわやかなグループを目ざしています。

このたびビージーズとの共演を大きな機会として、少しでもその音楽性、音楽姿勢を学びとり、今後の彼らの新しい礎を築いて行くでしょう。

Belle(ベル)プロフィール

●広川ナオ(リーダー)
昭和29年３月15日生　身長179㎝、体重55㎏　サイド・ギター、ヴォーカル担当

●大川ヒロシ
昭和29年８月17日生　身長173㎝、体重54㎏　サイド・ギター、ヴォーカル担当

●杉山トモカズ
昭和29年11月29日生　身長175㎝、体重57㎏　リード・ギター、ヴォーカル担当

●福沢タカシ
昭和30年１月25日生　身長177㎝、体重58㎏　ベース・ギター、ヴォーカル担当

全員、北海道の出身で、昨年の３月に上京。最近「コーヒー一杯の幸福」でレコード・デビューしました。デビュー早々、尊敬するアーティスト、ビー・ジーズと共演なんて夢のよう、全員“死んでもいい”なんて言っています。

BeeGees

ビー・ジーズ完全年表

1945
8月18日 ●元メンバーのビンス・メロニー、オーストラリアのシドニーで生れる。

1946
3月24日 ●元メンバーのコリン・ピーターセン、オーストラリアのクイーンズランドで生まれる。
9月1日 ●イギリス、マン島ダグラスでバーバラ、ヒュー・ギブ夫妻の間に長男のバリー誕生。

1948
5月2日 ●元ドラマー、ジョフ・ブリッジフォード・オーストラリアで生まれる。

1949
12月22日 ●ロビン・ギブ、モーリス・ギブの双子の兄弟誕生。

1956
●ギブ兄弟、アマチュア、ロック・グループを結成。

1958
●ギブ一家、イギリスからオーストラリアのブリスベーンへ移住。
●ブリスベーンのローカル・ステーション4KQの「タレント・ゲスト」という番組に出演。

1960
3月 ●ブリスベーンのABCテレビから30分のレギュラー番組 "Anything Goes"に出演。

1963
1月 ●ギブ兄弟「三つのキス"Three Kisses of Love"」(バリー作曲)でフェスティヴァル・レコードからデビュー。
春 ●「三つのキス」に続く第2弾「ティンバー"Timber"」を発売、この曲はオーストラリアでビッグ・ヒットとなり、ギブ兄弟の名を一段と高める。
夏 ●第3弾シングル「閉所恐怖症"CLAUSTROPHOBIA"」を発売。

1964
●「ワインと女"Wine And Woman"」、「アイ・ワズ・ア・ラヴァー"I was a Lover"」のシングルがたて続けにヒット。
●この頃、前記のヒット曲を収めたLP「ビー・ジーズ若き日の想い出」「ビー・ジーズ・ヒット・アルバム(オーストラリアの想い出)」をフェスティヴァル・レコードからリリース。

1965
●オーストラリアで"最優秀作品賞"を受賞。

1966
●オーストラリアで65年に続き2年連続"最優秀作品賞"を受賞。更に最優秀オーストラリア・グループにえらばれる。

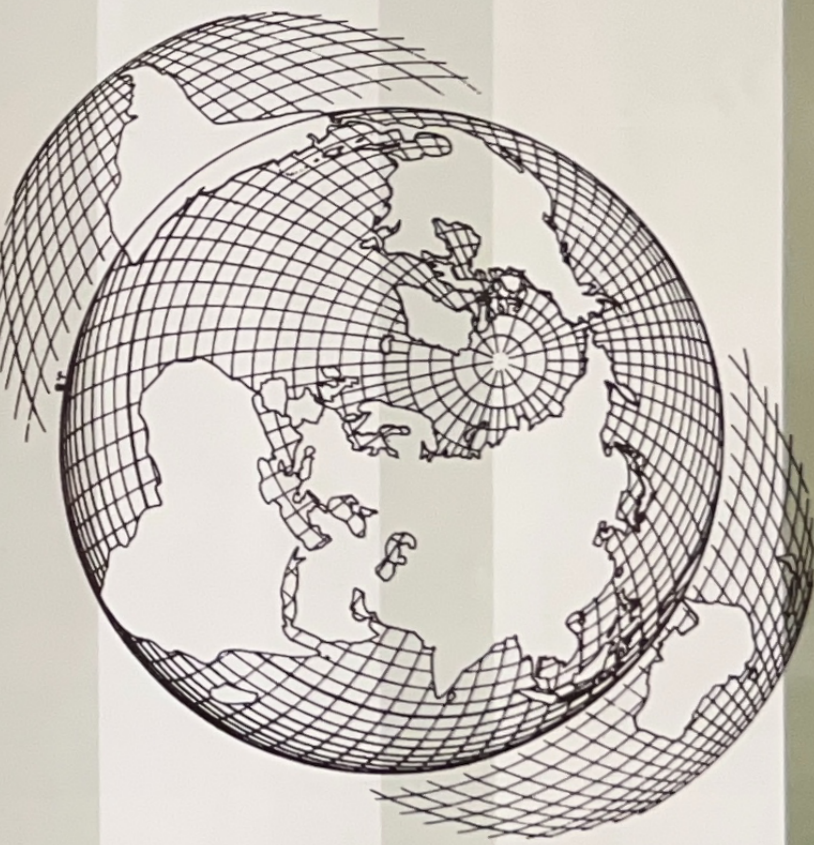
1967
2月 ●オーストラリア時代最後のヒット曲「スピックス・アンド・スペックス"Spicks & Specks"」、No.1となる。(この曲はイギリスでのデビュー盤とはり、オランダでもNo.1のヒット曲になる。)
●ギブ一家、オーストラリアから再びイギリスにもどる。
2月24日 ●ビートルズのマネージャーであった故ブライアン・エプスタインが主宰していたネムズ・エンタープライズのマネージング・ディレクター、ロバート・スティグウッドと5年間の契約を結びオーストラリア生まれのコリン・ピーターセン、ヴィンス・メロニーを加え、ビー・ジーズ、デビュー。
5月5日 ●「ニューヨーク炭鉱の悲劇"New York Mining Disaster 1941"」を発売。同時にアトコ・レコードと25万ドルの契約を結ぶ。
5月20日 ●同曲「メロディ・メーカー紙(以下MM紙と略す)」で17位にランク。
5月26日 ●同曲「キャッシュ・ボックス誌(以下CB誌と略す)」早くも73位。
7月1日 ●同曲CB誌で最高17位。「ビルボート誌(以下BB誌と略す)」では14位。
夏 ●オーストラリア国籍のままイギリスで演奏していけないということでファン騒ぐ。
8月26日 ●シングル「ラヴ・サムバディ"To Love Somebody"」(日本でのデビュー曲)CB誌で25位、BB誌では17位まで上昇。
9月2日 ●同曲CB誌で24位にランク。
10月14日 ●オーダーだけで25万枚を突破した「ホリディ"Holiday"」CB誌で48位。
10月21日 ●日本でも最大のヒット曲となった「マサチューセッツ"MASACHUSETTS"」ニュー・ミュージカル・エクスプレス紙(以下NME紙と略す)、MM紙で共に第1位となる。
11月4日 ●アメリカでは「ホリディ」がCB誌で14位、BB誌で21位。
11月22日 ●NME紙に「ワールド"World"」初チャート19位。
11月25日 ●MM紙でも同曲27位に初チャート。
12月9日 ●「マサチューセッツ」CB誌で11位。

1968
1月 ●アメリカでは予約注文だけで10万枚を突破したデビュー・アルバム「ザ・ビー・ジーズ・ファースト」(ニューヨーク炭鉱の悲劇、ホリディなど全14曲を収録)日本で発売、シングル「マサチューセッツ」も大ヒット。
1月31日 ●MM紙で「ワーズ"Words"」25位に初チャート。
2月2日 ●初めてのアメリカ公演をハリウッド近くのアナハイム・コンヴェンション・センターで2回行う。その収益は2万5千ドル以上にのぼり、彼らは公演後1週間カリフォルニアに滞在。
2月17日 ●「ワーズ」CB誌で最高27位まで上昇。
2月26日 ●ビー・ジーズのミュージカル・ディレクター、ビル・シェファードが指揮する20人のイギリスのミュージシャンからなるオーケストラと共にドイツ公演を行う。(3月12日まで)
3月29日 ●イギリス、リーズのタウン・ホールでコンサート。(ゲストはグレープ・フルーツ、ディブ・ディ・グループ、なお4月21日から27日まではファウンディションズ)
3月30日 ●チェスターABCにてコンサート。
3月31日 ●マンチェスター・パレスにてコンサート。
4月1日 ●レチェスターのドゥ・モンフォール・ホールにてコンサート。
4月4日 ●ケンブリッヂのリーガルにてコンサート
4月5日 ●スロウのアデルフィにてコンサート。
4月6日 ●シェルフィールドのシティ・ホールにてコンサート。
4月7日 ●バーミンガムのハイポドロームにてコンサート。
4月10日 ●カーライスルABCにてコンサート。
●「マサチューセッツ」「ワールド」などを収めたLP「マサチューセッツ/ザ・ビー・ジーズ」日本で発売。
4月11日 ●グラスゴーのグリーズ・プレイハウスにてコンサート。
4月12日 ●エジンバラABCにてコンサート。
4月13日 ●ストックトンABCにてコンサート。
●シングル「ジャンボー"Jumbo"」MM紙で27位にチャート。
4月14日 ●リバプールのエムパイアにてコンサート。
4月17日 ●ポーツマスのガイド・ホールにてコンサート。
4月19日 ●ハンレーのゴーモントにてコンサート。
4月20日 ●バルトンのオデオンにてコンサート。
●CB誌で「ジャンボー」54位、BB誌は57位。
4月21日 ●ハルABCにてコンサート。
4月22日 ●リンカーンABCにてコンサート。
4月24日 ●サリスベリーのオデオンにてコンサート。
4月25日 ●ロンフォードのオデオンにてコンサート。
4月26日 ●エクスターのオデオンにてコンサート。
4月27日 ●カーディフのキャピトルにてコンサート。
4月28日 ●トゥーティングのグラナダにてコンサート。
5月1日 ●コークのサヴィイにてコンサート。
5月2日 ●ダブリンのアデルフィにてコンサート。
5月3日 ●ベルファーストABCにてコンサート。
6月11日 ●ドラマーのコリン・ピーターセン、マネージャー秘書のジョアン・ニュートン(23才)と結婚。
7月末 ●アメリカへコンサート・トゥアーに向かう予定がロビン・ギブのノイローゼで延期。
8月2日 ●イギリスで「獄中の手紙"I've Gotta Go ta Message To You"」をリリース。
8月31日 ●同曲NME紙で2位、MM紙で3位にランク。
9月1日 ●「獄中の手紙」「ジョーク」「ジャンボー」などを収めたアルバム「アイディア/ザ・ビ・ジーズ」イギリスでリリース。
10月5日 ●同アルバムCB誌LPチャートで13位。
10月～11月 ●「キッチナー卿の小さなドラマー少年」の撮影のためケニアへロケ。
12月 ●メンバー、オーストラリアに戻る。
12月4日 ●ロビン、18才のモーリー・フリーズと結婚。(結婚へ進展するきっかけは、一年前の列車事故の時、ロビンが彼女を助けたということ)。
12月10日 ●LP「アイディア」日本で発売。
12月中旬 ●モーリス、イギリスにもどりルルの婚約を発表。
●ヴィンス・メロニー、グループを脱退。

1969
2月8日 ●「ジョーク"I Started A Joke"」CB誌で6位。
2月 ●脱退したヴィンス・メロニーのプロデュースにより、ニュー・グループ、アシュトン・ガードナー&ダイク、デビュー。
2月第2週 ●「若葉のころ"First of May"」イギリスでリリース。
2月18日 ●ルルとモーリス結婚。
3月1日 ●「若葉のころ」「メロディ・フェア」などを収めた彼らのはじめての2枚組トータル・アルバム「オデッサ」CB誌で初ランク56位。
3月22日 ●「若葉のころ」、MM誌で7位。NME紙では8位にランク。
3月29日 「オデッサ」CB誌で最高20位。
4月19日 ●「若葉のころ」CB誌で18位。
4月 ●ロビン・ギブ、グループを脱退。
5月28日 ●モーリス、家の近くでロールス・ロイスを運転中、事故をおこし軽いケガをする。
5月31日 ●3人になったビー・ジーズのシングル「トゥモロウ・トゥモロウ"Tommorow Tommorow"」CB誌で51位。
6月21日 ●同曲NME紙で25位。
6月27日 ●ロビン・ギブ初のソロシングル「救いの鐘"Saved by The Bell"」、イギリスでリリース。
夏 ●ドラムのコリン・ピーターセン、グループを脱退。メンバーはバリーとモーリスの2人となる。
●バリー69年度ベスト・ドレッサーNo.1に選ばれ500ポンドの銀製の像を授与さる。
8月23日 ●「救いの鐘」、NME紙で2位、MM紙でも2位。
8月30日 ●「想い出を胸に"Don't Forget To Remember"」NME紙で12位、MM紙で11位、CB誌で76位初チャート。
9月 ●TV映画「キューカンバー・キャッスル"きゅうりのお城"」の撮影に入る。
9月10日 ●「トゥモロウ・トゥモロウ」日本で発売。
9月20日 ●「想い出を胸に」、NME紙で2位。
9月27日 ●同曲MM誌で2位。
秋 ●アルバム"The Best of Bee Gees"ゴールド・ディスクを受ける。
●バリーとモーリス、ニューレーベルGEE GEEを創立。

1970
1月 ●バリーとモーリス共演のテレビ用映画「キューカンバー・キャッスル」、68年暮から13週間にわたって、イギリス、アメリカで放映。
3月10日 ●ロビン・ギブの第2弾ソロ・シングル「ミリオン・イヤーズ"A Million Years"」日本で発売。
5月10日 ●ロビン・ギブの第3弾シングル「夏と秋の間に」日本で発売。
6月10日 ●ロビンのソロ・アルバム「救いの鐘/ロビン・ギブ」日本で発売。
7月10日 ●アルバム「キューカンバー・キャスル」日本で発売。同時にシングル・カットした「アイ・オー・アイ・オー"I.O.I.O"」がヒット。
●モーリス、バリーとのコンビを続けながらソロ・シングル「レイルロード"Railroad"」日本で発売。
8月10日 ●バリー・ギブのシングル「"I'll Kiss Your Memory"」、日本で発売。
夏 ●この頃バリーとモーリス、「小さな恋のメロディ」のサウンド・トラックやバーバラ・ウィンザーと共演の、"Sing A Rude Song"に出演、また音楽を担当。
●ロビン・ギブ・グループ脱退後17ケ月ぶりにバリーとモーリスのもとにもどる。
9月1日 ●バリー、リンダ・グレイ(20才)と結婚。
9月30日 ●ギブ兄弟が再び一緒になって初めてのアルバム「トゥー・イヤーズ・オン」からのシングル「ロンリー・デイ"Lonely Days"」をイギリスでリリース。
10月31日 ●ビー・ジーズ再結成後初めてLW-TVに出演。
11月27日 ●アルバム「トゥ・イヤーズ・オン」イギリスでリリース。
12月12日 ●イギリスのラジオ・キャンペーン「STAMP OUT TONY BLACKBURN」に出演。
12月26日 ●映画「キューカンバー・キャスル」、ブラインド・フェイスのハイド・パークにけるコンサートのフィルムと共に放映される。

1971
1月16日 ●「トゥー・イヤーズ・オン」、CB誌LPチャート84位に初ランク。
1月30日 ●「ロンリー・デイ」、ドーンの「ノックは3回」に代ってCB誌で第1位となり、同時にRIAA公認のミリオン・セラーとなる。
2月～4月 ●アメリカを始め、イギリス、東南アジア、ヨーロッパ諸国、オーストラリア等でコンサート・トゥアーを行う。
5月10日 ●アルバム「トゥー・イヤーズ・オン」、「ロンリー・デイ/ザ・ビージーズ」として日本で発売。
6月26日 ●ヘラルド映画「小さな恋のメロディ」(ワリス・フセイン監督、マーク・レスター、ジャック・ワイルド、トレーシー・ハイド主演、ビー・ジーズ、サウンド・トラックを担当)日本で公開、「ある愛の詩」をしのぐほどのロング・ランとなり秋まで続映。
6月～9月 ●同時に主題歌「メロディ フェア"Melody Fair"」大ヒット。
8月 ●元ティン・ティンのドラマー、ジョフ・ブリッジフォード、ビー・ジーズに加わる。
8月10日 ●シングル「傷心の日々」日本で発売。
8月14日 ●「傷心の日々」"How Can You Mend A Broken Heart"CB誌で第1位。「ロンリー・デイ」に続くRIAA公認のゴールド・ディスクとなる。
9月 ●アメリカでコンサート・トゥアーを行う。
9月25日 ●「傷心の日々」「イスラエル」などを収めたLP「トラファルガー」、アメリカで発売、CB誌LPチャート62位初登場。
10月10日 ●シングル「イン・ザ・モーニング"In the Morning"」日本で発売。
10月23日 ●「トラファルガー」CB誌で最高18位にランク。

1972
1月15日 ●シングル「マイ・ワールド"My World"」イギリスでリリース。
●アルバム「トラファルガー」の中の曲「過ぎ去りし愛の夢"Don't Wanna Live Inside Myself"」日本で発売。
1月22日 ●「マイ・ワールド」CB誌初登場50位。
1月27日 ●ニュージーランドのオークランドで公演。
1月29日 ●オーストラリアのメルボルンにて公演。
1月30日 ●シドニーにてコンサート。
2月1日 ●ブリスベーンにてコンサート。
2月3日 ●アデレードにてコンサート。
2月4日 ●パースにてコンサート。
2月5日 ●「マイ・ワールド」CB誌チャート3週目で34位。
2月25日 ●オランダ公演。
●アムステルダムのテレビにゲスト出演。
2月26日 ●「マイ・ワールド」CB誌18位。
3月4日 ●同曲CB誌15位。
3月9日 ●インドネシアのジャカルタにてコンサート。
3月10日 ●「マイ・ワールド」日本で発売。同時に2枚組来日記念アルバム「マイ・ワールド/ザ・ビー・ジーズ、ベスト・コレクション」発売。
●今日から13日までシンガポール、香港公演。
3月20日 ●初の来日。
●ドラマーのジョフ・ブリッジフォード脱退。
3月22日 ●記者会見とレセプションが東京ヒルトン・ホテルで行われた。席上ポリドール㈱より「小さな恋のメロディ」の大ヒットを記念してバリー、ロビン、モーリスにゴールド・ディスクを贈る。
3月23日 ●渋谷公会堂でコンサート。
3月24日 ●武道館でコンサート。
3月25日・26日 ●大阪フェスティヴァル・ホールでコンサート。
3月28日 ●次のコンサート地のクアラルンプールへ出発。
4月 ●ニュー・アルバムのレコーディングをロンドンで始める。
7月7日 ●「ラン・トゥ・ミー"Run To Me"」イギリスで発売。
10月 ●「ビー・ジーズの新らしい世界"To Whom It May Concern"」イギリスで発売。
11月21日 ●「ほほえみの海"Sea of Smiling Faces"」日本で発売。

1973
2月19日 ●イギリス・ロイヤル・フェスティヴァル・ホールでロンドン・シンフォニーをしたがえコンサート。
3月1日 ●彼等のプロデューサーであり、また所属プロダクションの社長であるロバート・スティッグウッドが新レーベル"RSO"を設立し、E・クラプトン、J・ブルース、WB&L、リック・グレッチ達とともに、ポリドールよりRSOへ移る。
●アルバム「ライフ・イン・ア・ティン・キャン"Life in A Tin Can"」発売。
3月30日 ●「希望の夜明け"Saw A New Morning"」イギリスで発売。
4月 ●アメリカNBC－TVの、「ミッドナイト・スペシャル」出演。
6月 ●イギリス国内コンサート。
6月22日 ●「ひとりぼっちの夏」"Wouldn't I Be Someone"とアルバム「ベスト・オブ・ビー・ジーズ・VOL II」イギリスで発売。
7月28日 ●アメリカNBC－TV「ミッドナイト・スペシャル」へ再び出演。
9月 ●2度目の来日。
12月1日 ●バリー・ギブと妻リンダにスティヴ君生まれる。

1974
3月 ●「ミスター・ナチュラル」"Mr Natural"10ケ月振りのシングル。イギリス/アメリカで発売。日本は5月に発売。
5月 ●1年2ケ月振りにニュー・レコーディングのアルバム"Mr. Natural"発売。(日本では「幸せの1ペンス」の邦題で10月21日に発売)
6月 ●「小さな恋のメロディ」がファンの要望によりリヴァイヴァル上映。
●「幸せの1ペンス」"Throw A Penny"アメリカで発売。日本発売は10月1日。
7月 ●ヴェネゼーラのポリドールより"Best of The Bee Gees"の売上げに対しゴールド・ディスクが贈られた。
8月 ●イギリスでは"Throw A Penny"のシングルを発売せず、同じくアルバム"Mr. Natural"に入っている"Charade"を発売。日本では12月に発売の予定。
8月21日 ●この日から9月8日までカナダ公演。
9月下旬 ●一旦ロンドンへ戻り、南アフリカ、オーストラリア、東南アジア、日本へのツアーに出発。
10月 ●3度目の来日。
12月 ●待望初のライブ・アルバム発売予定。

ビー・ジーズ 曲目解説

当日のプログラムはこれらの曲目のなかから選ばれる予定です。

塩田真弘（ポリドール洋楽ディレクター）

ニューヨーク炭鉱の悲劇
"New York Mining Disaster 1941"

1967年4月14日にイギリスで発売されたデビュー曲（日本では「ラヴ・サムバディ」がデビュー曲）で、ビルボード（以下BB誌と略す）では同年5月27日に第14位まで上昇している。

常に「愛」について歌う彼等にとって、この曲は炭鉱事故を歌うという異色作品である。

メロディ・フェア
"Melody Fair"

日本では「マサチューセッツ」と共に彼等の代表曲とされており、日本だけのシングル・カット。

映画「小さな恋のメロディ」のサントラとして使われ大ヒットし、'71年の年間第1位になっている。彼等はすでに、'69年に発売された2枚組LP「オデッサ」の中で歌っている。

アイ・オー・アイ・オー
"I. O. I. O"

ビー・ジーズとしては珍しくミディアム・テンポの軽快な曲。しかし、テンポ・アップしてもメロディーの美しさは失っていない。

アメリカでは'70年の7月に発売されたが、ほとんどランク・アップせず、ヒットしていない。しかし日本やイギリスでは7ケ月振りのシングルということもあって大ヒットしている。

イン・ザ・モーニング
"In The Morning of My Life"

「メロディ・フェア」と同様、映画「小さな恋のメロディ」の中に使われた曲で、タイトル通り、朝のさわやかなフィーリングが充分に表現されている。

彼等が、この曲を作ったのは古く、オーストラリア時代であり、その当時はギターだけでストリングスは使わずに歌っていた。この曲も日本だけのシングル・カット。

ラヴ・サムバディー
"To Love Somebody"

日本でのデビュー曲となったこの曲は、彼等の数多い作品の中で、傑作のひとつとされている。そして世界各国の名歌手によって取りあげられ、その数は200を越えるという。

イギリスで発売されたのは'67年の6月で、7月15日にはBB誌で17位になっている。

過去、1回、2回の来日の時も歌っている。

ワールド
"World"

1967年の11月17日に「マサチューセッツ」をフォローするシングルとしてリリースされた。

ビー・ジーズの作品はスロー・テンポの曲が多いが、この曲もスローなナンバーで、哀愁味をおびた味わい深い作品である。

ロンリー・デイ
"Lonely Days"

'70年の8月にロビンが再びビー・ジーズに加わりバリー、モーリス、ロビンのギブ3兄弟で再スタートした。

この曲は再スタート第1弾シングルで'71年1月2日BB誌で初の第1位を獲得し、また100万枚以上の売上げを記録している。

再スタートを祝福する大ヒットで一時沈んでいたビー・ジーズ熱が盛り上った。

若葉のころ
"First of May"

これも「小さな恋のメロディ」に使われ、以前にも増してヒットした曲。

映画の中では5曲ビー・ジーズの曲が使われているが、この曲が、もっとも画面と音とがマッチしていて、スクリーン・ミュージックの理想を示している。

ビー・ジーズと「小さな恋のメロディ」の結びつきは、こと日本に関しては大成功だった。

ホリディ
"Holiday"

イギリスと日本では「マサチューセッツ」のB曲として、アメリカでは「マサチューセッツ」とは別に発売され大ヒットしている。

英国、日本ではB面のため「マサチューセッツ」の陰にかくれがちだが、曲の構成が素晴らしく、以後今日までA面の曲のように、常に彼等のベスト・ソングの中に入れられている。

ワーズ
"Words"

バリー・ギブがヴォーカルをとるこの曲は高音部の美しさを強くアピールしたもので、エルヴィス・プレスリーも彼のレパートリーに、この曲を加えている。

アメリカでは「マサチューセッツ」のヒットに続いて'68年10月にBB誌で15位にまでランク・アップしている。

傷心の日々
"How Can You Mend A Broken Heart"

「ロンリー・デイ」に続いて発売した、この曲も同様BB誌で'71年8月13日にナンバー・ワンになっている。もちろんゴールド・ディスクにもなっている。新生ビー・ジーズ以前にも名曲は多くあるが、この曲は彼等の全生涯でもベストの作品である。シュール、レターメンなど数多くのアーティストが歌っている。

ミスター・ナチュラル
"Mr Natural"

'73年の6月に発売された「ひとりぼっちの夏」以来11ケ月振りに発売された。

ファンは11ケ月のブランクに不安を感じたが、この曲が、それを打ち消してくれた。

彼等の曲作りは、デビュー以来違ってきているが、根にあるものは決して変っておらず、この曲も美しいハーモニーとメロディを聞かせてくれる。

マサチューセッツ
"Massachusetts"

ビー・ジーズの名を一躍全世界へ知らしめた大ヒット曲。'67年8月に発売されBB誌では11位になり、日本では翌年に発売されると同時に大ヒットし、日本全国のヒット・パレードの第1位を独占してしまい、この年の年間第1位にもなっている。ヴィンス・メロニー、コリン・ピーターセンと5人時代の代表作。

獄中の手紙
"I've Gotta Get A Message To You"

死刑を宣告された人が、死に直面して恋人を思ったり、いろいろ想って苦悩する様子を歌ったもの。ロビンのヴォーカルは歌詞の内容ほど暗くはない。

イギリス、アメリカでは'68年の8月に発売され、これまでの最高位を記録している。

BB誌第8位。

ラン・トゥ・ミー
"Run To Me"

'72年の7月7日、七夕の日に発売されたこの曲は、同年9月30日にBB誌第16位にランクされている。彼等らしくロマンティズムが溢れる作品。

彼等は、この時期からイギリスでの仕事よりもアメリカでのそれの方が多く、アルバムの制作もイギリスよりもアメリカでの方が多くなっている。

幸せの1ペンス
"Throw A Penny"

'74年6月にアメリカで発表された、この曲は最新LP "Mr.Natural" からのカットで、イギリスではリリースされていない。

バリーのヴォーカルで始まり、途中ロビンのヴォーカルに変る時にテンポも変り、そのフレーズが何んとも、いえないビー・ジーズらしい味がある。

ジョーク
"I Started A Joke"

4枚目のアルバム「アイディア」からシングル・カットされた曲で'68年12月にBB誌第6位になっている。

この曲はイギリスではシングル・カットされていない。

これ以前の曲より、曲構成が複雑になっているが、メロディーは美しく、彼等の良さは増々みがきがかかっている。

想い出を胸に
"Don't Forget To Remember"

彼等の曲は日本人受けするものばかりだが、特に、この曲は日本人受けしやすいメロディを持っている。

ロビンがソロとして独立して、バリーとモーリスとのデュオで歌った曲で、彼等が制作したTV映画「キューカンバー・キャッスル」にも収められている。

マイ・ワールド
"My World"

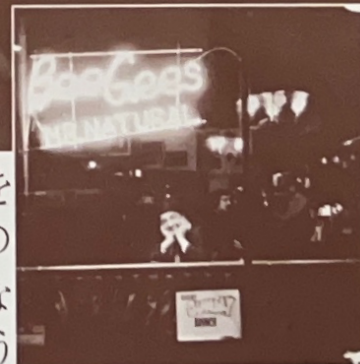
'72年の1月14日に日本を除く世界で同時発売され、そしてジャケットも同一デザインであった。（日本では来日に合せ3月に発売）

スロー・ミディアムのこの曲は彼等の昔のナンバー「マサチューセッツ」「ラヴ・サムバディ」などを思わせるメロディアスなもので、バリー・ギブがソロ・ヴォーカルを担当している。

シャレード
"Charade"

イギリスでは「幸せの1ペンス」に替ってこの曲が'74年8月に発売された。

同様 "Mr.Natural" からのカットである。

「シャレード」という同名異曲があるが、ビー・ジーズのオリジナルのこの曲も、映画音楽らしいムードを持った、たいへん素晴らしい曲である。

KYODO TOKYO PRESENTATIONS 1974

秋は、空の高さをつれてくる。
秋は、透明な光をつれてくる。
秋は、ラブ・サウンズをつれてくる。

キョードー東京 電話03-407-8155・3426
キョードー大阪 電話06-344-0412
キョードー横浜 電話045-251-1861
キョードー札幌 電話011-521-6531
キョードー北陸 電話0762-32-2208

Love Sounds

第1回ブルース・フェスティバル

待望!!ついにやってくる本場のブルース。《初来日》

BLUES FESTIVAL ①

ハミー・ニクソン(ハーモニカ) HAMMIE NIXON
スリーピー・ジョン・エスティス(ギター・ヴォーカル)
SLEEPY JOHN ESTES
ロバート・ジュニア・ロックウッド(ギター・ヴォーカル)
ROBERT Jr LOCKWOOD
ジ・エイシズ(リズムセクション) THE ACES

●東京公演
11月25日(月)・26日(火)・27日(水)・28日(木)
各7時開演 芝・郵便貯金ホール
A=¥2,500 B=¥2,00C=¥1,500

●大阪公演
11月30日(土) 7時開演 厚生年金大ホール
S=¥2,500 A=2,100 B=¥1,800 C=¥1,500

①ハミー・ニクソン(ハーモニカ)
HAMMIE NIXON
スリーピー・ジョン・エスティス
(ギター・ヴォーカル)
SLEEPY JOHN ESTES
②ロバート・ジュニア・ロックウッド
(ギター・ヴォーカル)
ROBERT Jr LOCKWOOD
③ジ・エイシズ(リズム・セクション)
THE ACES

ストリングスの魔術師、ポール・モーリアが、
恋人達に贈るラブ・サウンズ。

ポール・モーリア・グランド・オーケストラ
PAUL MAURIAT GRAND ORCHESTRA

●倉敷公演 11月14日(木) 6時30時開演 倉敷市民会館
●小倉公演 11月15日(金) 6時30分開演 小倉市民会館
●福岡公演 11月16日(土) 3時・6時開演 福岡市民会館
●大阪公演 11月17日(日) 3時30分・6時30分開演
11月18日(月)・19日(火) 各6時30分開演 フェスティバルホール
●神戸公演 11月20日(水) 6時30分開演 神戸・国際会館
●和歌山公演 11月21日(木) 7時開演 文化会館
●高知公演 11月25日(月) 6時開演 高知県民ホール
●松山公演 11月26日(火) 6時30分開演 松山名古屋市民会館
●名古屋公演 11月27日(水) 6時30分開演 名古屋市公会堂
12月7日(土) 4時・7時開演 名古屋市民会館
●札幌公演 12月1日(日) 2時・6時開演 厚生年金会館
●静岡公演 12月4日(水) 6時30分開演 駿府会館
●金沢公演 12月5日(木) 7時開演 金沢市観光会館
●富山公演 12月6日(金) 7時開演 富山市公会堂
●横浜公演 12月17日(火) 6時30分開演 横浜文化体育館

ニッポン放送ハッピーコンサート

12月14日(土)2時開演 新宿・厚生年金ホール
S=¥2,600 A=¥2,300 B=¥1,800 C=¥1,500
好評前売中

流れるようなメロディーに、オリーブの香りを添えて。

カラベリときらめくストリングス
CARAVELLI AND HIS MAGNIFICENT STRINGS

●東京公演 12月2日(月)・3日(水) 各7時開演 中野サンプラザホール
S=¥2,800 A=¥2,500 B=¥2,000 C=¥1,500
ティーンズ・シート=¥1,000 ラブ・シート(2名様)=¥5,100

●大阪公演 12月5日(木) 6時30分開演 フェスティバルホール
●福岡公演 12月8日(日) 2時開演 福岡市民会館
●広島公演 12月9日(月) 6時30分開演 郵便貯金ホール
●防府公演 12月10日(火) 6時30分開演 防府市民会館
●小倉公演 12月11日(水) 6時30分開演 小倉市民会館
●神戸公演 12月12日(木) 6時30分開演 神戸・国際会館
●岡山公演 12月13日(金) 6時30分開演 岡山市民会館
●長野公演 12月17日(火) 6時30分開演 長野市民会館

今年もまたあなたにすてきなクリスマスプレゼント

ニニ・ロッソ＝クリスマスコンサート
NINI ROSSO X'mas Concert

●東京公演―12月24日(火)・25日(水)各7時開演
新宿厚生年金ホール
A=¥2,500 B=¥2,000 C=¥1,500
ティーンズシート=¥1,000 ラブシート(2名様)=¥4,500

● 大阪公演
12月22日(日)2時・6時開演 フェスティバルホール
S=¥2,500 A=¥2,100 B=¥1,600 C=¥1,200
BOX=¥3,500
ラブ・シート(2名様)=¥4,500

このプログラムにご協力して下さった方たち

野口五郎(のぐち・ごろう)さん

ご存じティーン・ファンのアイドル。郷ひろみ、西城秀樹とともに"新ご三家"として、絶大な人気を集めています。人気だけでなく歌の実力も、眼を見はるような上昇ぶりで、生来の真面目さとともにマスコミ関係者の評判も上乗です。かつて自らバンドをつくり、ロック・ナンバーを歌っていたそうで、その手引きがベンチャーズだったとか。レパートリーのなかにはポピュラーも多く、ビー・ジーズの曲もあります。

南沙織(みなみ・さおり)さん

「17才」でデビューしてからもう3年がすぎました。従って彼女も20才――。かつての可憐さは匂うばかりの華やかさに美しく変貌しました。英語の達者なことは数多い歌手のなかでも指折りで、そのせいかポピュラー・ミュージックは大好き。自分のLPにもカーペンターズの曲など、気に入ったものを選んでいます。ビー・ジーズのものでは「メロディー・フェア」が大好きで、レコーディングもしているほどです。

中根幸夫(なかね・ゆきお)さん

音楽シーズン到来ともなれば、新聞記者は眼のまわるような忙しさになります。外国からのミュージシャン、そして各種音楽賞をめぐっての最後の猛烈なせり合い……。おかげで多趣味の中根さん、「好きなことといえば歩くぐらいしかできない」とこぼしています。もともと仏文出身なのに、ヘルマン・ヘッセなどドイツ文学を愛読していたというヘソまがりですが、最近はほとんど小説を読まず、専門書が多くなったようです。

八木誠(やぎ・まこと)さん

それも知らずに八木さんの声を耳にしているファンは、数が知れないでしょう。東京のステーションはもちろん、地方局の出演番組も多く、日本中で1週間にどれだけ八木さんの名D・Jぶりが流れているか、計算してみるのも大仕事です。ソウルが大好きで、ことしはソウル系アーチストの来日が多かったので、ホクホクご機嫌の毎日でした。ビー・ジーズはあのナイーブさが気にいって、それはそのまま八木さんの人柄を物語っています。

木崎義二(きざき・よしじ)さん

評論家、そしてディスク・ジョッキーとしてロックに入れあげている名物男。仲間うちでは"キーやん"の愛称で親まれています。かつて「ティーン・ビート」誌編集長時代に、ビー・ジーズとの出逢いがはじまり、改めて時の流れに感無量の様子です。細い身体のどこにあのエネルギーがあるのか、と疑うほどタフで、それはロックにかぎらず、ポピュラー・ミュージック全般をカバーしているところにも現われています。

塩田真弘(しおだ・まさひろ)さん

ポリドールの洋楽ディレクターで、ビー・ジーズを担当してからことしで5年目。今春、ロンドンを訪れたとき、ビー・ジーズのメンバーのひとりモーリスに会ってきたそうです。最近はロックのフィルム・コンサートで、九州、中国、新潟などの各地をまわり、ファンのナマの声を集めてきました。なかなかのハンサム・ボーイで、ファン・クラブの女の子にも人気があります。「あのメガネがチャーム・ポイントね」とはある可愛い娘さんの弁。